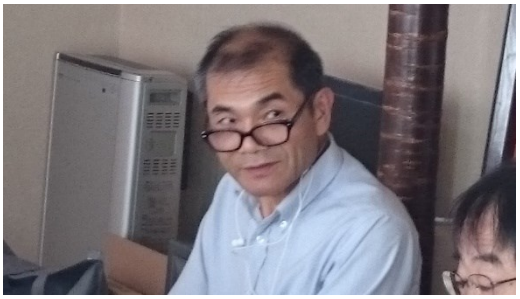
「阿賀に生きる・阿賀の暮らし」交流セミナー報告



映画「阿賀に生きる」上映会　　理事　　渡邊　豊

映画の感想についてはあえて書きません。ＤＶＤが出ていますので、ぜひご覧ください。

今回の企画は、昨年度の東京大会に続くものです。シンポジストの旗野秀人氏は新潟県人であり、新潟水俣病や地域の文化活動に関して地元紙新潟日報等マスコミで紹介されることが多くあります。その方のお話しを新潟ではなく立教大学で初めて伺ったとは、同県人としてたいへん恥ずかしい思いです。

島田治子副会長のご尽力で、旗野氏をメーンゲストとしたセミナーが実現しました。そう考えると、映画は旗野氏のお話しとセットでないと観る意義は弱くなります。毎年５月４日、新潟県阿賀野市で追悼集会が行われ、映画「阿賀に生きる」が上映されます。来年は 23 周年を迎えます。私はこれから毎年参加しようと思っていますので、あなたもぜひ映画を一緒に観ましょう。旗野氏や患者さんのお話しを伺いましょう。「“ミニ”福祉文化現場セミナー」として気軽に毎年開催していければよいと思っています。

映画は、写真のとおり、旅館の長細い部屋で壁に模造紙を貼りスクリーンとし観ました。1992 年製作ですが古さを感じさせません。阿賀野川流域で生活する・・・・・・やっぱり実際に観てください。

なお、製作当時、私は資金集めのために柳沢寿夫監督のドキュメンタリー映画「風とゆききし」などの上映会のお手伝いをしていました。映画を観ながら 20 代の自分を思い出したりして有意義なひとときでした。

旗野さん講演会　　北陸ブロック　五十嵐　勝

講演会は旗野さんの生い立ちから始まって、映画製作に関わるきっかけや被害者の支援活動を通して、昭和電工や国・県の対応の悪さから、 訴訟せざるを得なかった当時の状況を解りやすく、説明して頂きました。映画にも登場された旗野さんは当時 21 歳の凛々しい好青年で現在に至るまで、40 年以上継続して被害者に寄り沿って、支援活動を続けてこられたその生き方には、心から敬服致しました。

「阿賀に生きる」は、旗野さんが居られなかったら全く違ったドキュメンタリー映画になっていたものと思います。講演中、時々冗談を交えて自身の弱さを話され、少しも飾らず謙虚に話されている姿を見させて頂いて、すっかり旗野さんの大ファンになってしまいました。そんな旗野さんの人柄に映画に出演された皆さんは、旗野のさんから出演を頼まれたら断ることは出来なかったものと思います。

水俣病に苦しむ被害者の切なさを敢て描かずに、阿賀野川の自然の恵みと共存し、心豊かに生活を営んできた姿を表現したかったという思いを語られた時に、この映画は旗野さんが居られなかったら全く違う映画になっていたものと確信しました。講演の最後に話された、冥土連のお話しにはさらに、心打たれました。旗野さんがこれまで、被害者のためと思って支援してきたことが、実は自分の一人よがりで逆に皆さんを苦しませてきたのではないかと反省し、高齢になられた患者会の皆さんに生きていて良かったと思って頂ける活動は何かと思い立ち上げた会が冥土連です。 高齢で残された僅かな時間をとにかく楽しんで貰える模様しもの企画し、皆さんから冥土のみやげができたと喜んで貰える活動を展開されておらます。その会には、いろんな職種の若者が集まって会を盛り上げてくれると言うことを聞いて驚いてしまいました。 昨今、様々な会やサークルで若者の参加が減少し、会の存続が危

ぶまれている時代に、何が若者の達に共感を得て集まってくるのか、そのヒントを頂いた気がしました。
　若者を虜にする魅力の一つには、旗野さんの人柄にあると思いました。どんなに崇高な理念や会則があっても、そこに暖かな人間味溢れる人がいなければ、いつかその会は消滅して行くのではないかと思ったしだいです。
　今回の現場セミナーを通して、いまだ掴みきれていない福祉文化とは何かと言う命題に対する答えの一つが見えてきたように思ったしだいです。

２日目「環境と人間のふれあい館」「千唐仁集落」　　会　員　遠藤　和哉

　２日目の「環境と人間のふれあい館」では、「新潟水俣病」を解説した映像を見てから、新潟水俣病の被害者の「語り部」の方から直接お話しをお聞きしました。さらに、館長の塚田様から新潟水俣病の歴史や水俣病訴訟の概要、生活や環境について説明していただきました。
「新潟水俣病」のＤＶＤでは、取材・報道のあり方が差別・偏見を生み、増幅させてしまうことがあることを知りました。
　「語り部」の方からは、症状が現れてから今までの経緯や家族への想い、誤解や偏見についての話がありました。特に、偏見や差別は、家族にも言えない深く辛いものであることを再認識しました。
　館長の塚田様からは、阿賀野側流域の地形の模型を見ながら、人々のくらしと水環境との関係や、新潟水俣病訴訟について、被告の昭和電工側の反論根拠も合わせて説明していただきました。
　新潟水俣病の被害は、人々の無知に取材・報道のあり方、行政や医療の問題等により増幅され、さらに社会的被害となって広がり、地域の絆をも破壊して、埋めがたい深い溝を生み出しました。
　私たちは、このことを教訓として、人間の生活と環境との関係ついてさらに深く学び、行動していかなければならないと思いました。

【千唐仁集落での交流会について】　　北陸ブロック　五十嵐　真一

〇はじめに
　千唐仁（せんとうじ）は、阿賀野市（旧北蒲原郡安田町）を流れる阿賀野川の畔にあり、かつての患者運動の拠点となった集落です。ここに住む人々は、阿賀野川から様々な恵みを受けて暮らしてきたといいます。また映画「阿賀に生きる」でも描かれていたように幡野さんには、この集落の船頭さんと村ぐるみの潜在患者発掘運動（地元で集団検診を実現させる会）を起こし、認定申請を行うが全員棄却となった歴史があります。
〇交流会（於千唐仁多目的集会所）
　当初の予定より約１時間遅れで開会した交流会でしたが、８０～９０歳台となった４人の女性（水俣病未認定患者さん）がいつも自動車で送迎ボランティアをされているという旗野さんのお姉さんと一緒に参加してくださりました。参加者と共に松茸弁当やお手製の漬物等を食べた後、旗野さんの仕切りで当時のお話や現在考えている事等をいきいきとした表情でお話しいただき、質問の時間も取っていただきました。途中、関東ブロックから参加した梅津さんの新潟で就職した教え子も顔を出すサプライズもあり、楽しく交流することができました。
　旗野さんの説明の中で、故人も含め多くの未認定の人々について水俣病は、しびれ等の症状で決められるのではなく、その人達が発症までどの様な暮らしをしてきたか、水俣病の原因に対してどのような地域（文化の中）で生活していたかで判断されなければならないというお話が心に深く残りました。

「阿賀に生きる」現場セミナーに参加して　　関東ブロック長　　梅津迪子

抜けるような青い空、木々に吹きわたる風が何とも心地よい阿賀の現場セミナーの２日間であった。豊かな水の恩恵と果樹の緑、麦穂の大地が続くこの風景は、川への水銀垂れ流し問題（昭和電工）を除けば、大地の恵みを享受しながら「人が暮らす」「幸せとは何か」が永遠に続いていたことを確信するものであった。１日目は映画上映後、旗野さんの水俣病への心情や村人との係わり方や経緯を伺う。４０数年の歳月を振り返りながら「患者のじっちゃん（映画の主人公夫婦）に人間らしい生き方を教えてもらった」と何度も呟いていたのが印象的であった。翌２日目は場所を移動、新潟県立「環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館)」で語り部の山田サチ子さん（７５歳）から生々しい体験談を伺う。

彼女は阿賀野市で出生、２２・３歳頃（1985 年）から「めまい」「手のしびれ」「足の指先も痛くなる」症状はあったが特別気にもせず 26 歳で結婚、他市に転居する。2007 年に水俣病の報道を見て初めて「受診」を試みるが、医者の診断は「慢性多発性リウマチ」でコーチゾンの服用を指示される。反対に大きく深い口内炎を発する。一向に改善しない症状に各医院で受診するも「自律神経症」や「更年期等」と診断される。時を同じくして、H15 年に弟が膵臓がんで亡くなった。葬儀ではじめて弟が水俣病被害者手帳を有していたことを知り愕然としたとのこと。そういえば父は胃がん、母は子宮がんで亡くなったが、調べてみると被害者手帳を有していたことが判明。弟が通院していた病院を訪問し、関川医師から両親・弟の症状について聞かされ、ここで初めて自分のルーツに辿り着き「水俣病」と診断されたそうである。(妹二人も同様の経緯）家族の一員でありながら、近年までお互いがその症状や手帳を有していたことが語られることはなかったことに私はショックを受けたのである。

病気の原因が解明された現在でも、手帳を有している事実が明るみになると「破談」や「離婚」に繋がること、他者の目・評価が変わるのだと笑いながらも事実だと語られたのであった。午後は鳥屋野を経て「千唐仁集会所」で昼食を共にしながら安田患者会の方々と交流をはかる機会を得たが、ここでも水俣病の手帳と補償金を受領している方への偏見と差別が根強いことが語られた。現在も続く身体のしびれや感覚機能の麻痺は他者の目には見えず、わかりづらい。だからこそ苦しい。しかし、平均 90 歳の方々のなんと笑顔で表情のよいことか。愚痴めいたことを言わず、諸々の人生を達観した者にしか与えられない表情だろう。帰り際「もう、帰るのかえ」とぬくもりのある小さな手で握り締めてくれたばばさま。懐に飛び込んで泣きたくなるような切なさを感じた瞬間でした。

書物や資料・メディアで知っているつもりの知識も現場に佇み、自分の五感で感じることの大切さを痛感した現場セミナーでした。